

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究 A

研究期間：2009 年度—2012 年度

課題番号：21242033

研究課題名（和文）新自由主義の時代における生活世界が生成する新たな共同性に関する生活人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study on Newly Created Community in the Neo-liberalized World: From an Everyday Life-oriented Perspective

研究代表者

松田素二（Matsuda Motoji）

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50173852

研究成果の概要（和文）：

現代人類学は、これまでの中立性と客観性を強調する立場から、対象への関与を承認する立場へと移行している。だが異文化のフィールドへの「関与」を正当化する論理は何なのだろうか。本研究は、生活人類学的視点を樹立してこの問いに答えようとする。そのために本研究は、日本・東アジア、東南アジア、南アジア、アフリカの 4 つの地域的クラスターと、自然・環境、社会・関係、文化・創造という三つの系を設定し、それぞれを専門とする研究者を配して「生活世界安定化のための便宜」を最優先とする視点による共同調査を実施した。

研究成果の概要（英文）：

The upheavals experienced by the neo-liberal modern world have direct effects on the “field” in which anthropologists conduct their research and the people who live there. Problems such as civil wars and massacres, development and environmental destruction, immigration and exclusion, and poverty and the spread of infectious disease are not simply “local” in nature, but manifest themselves as well in the context of global relations of dependence. Under globalised neo-liberalism, anthropology has moved from a position that emphasizes neutrality and objectivity to one that acknowledges the commitment. But what logic justifies engagement and intervention in foreign cultures? In the intellectual and practical struggle to respond to that question, this study has examined and proposed an everyday life oriented anthropological approach.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	8,400,000	2,500,000	10,920,000
2010 年度	8,700,000	2,610,000	11,310,000
2011 年度	8,600,000	2,580,000	11,180,000
2012 年度	8,700,000	2,610,000	11,310,000
年度			
総計	34,400,000	10,300,000	44,720,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：ネオリベラリズム、グローバル化、コミュニティ、生活世界、生活人類学

## 1. 研究開始当初の背景

現代世界の周縁部に押しやられた共同体は、自然・生態環境の劣悪化や、生業基盤の崩壊に直面している。森林や河川は荒れ、農林漁業では生計がたちゆかなくなった。さらに伝統的な祭祀や社会組織を維持することも困難になっている。アジアやアフリカ、そして日本の過疎地域には、こうした危機的な状況にある共同体が数多く出現している。こうした周縁部の共同体は、これまで、中心から「問題」視され、つねに「援助と救済」の対象とされてきた。さらには中心部の人々を癒し慰めるために、すでに滅びた古き良き時代を保存する「観光保養の場」として位置づけられてきた。

しかしながら、こうした共同体のなかには危機的な状況のなかにあっても、森林や河川を保全したり、生業基盤を維持・再生したりする営みをつづけているものもある。また伝統的な祭祀を変容させながら継続したり、伝統的な相互扶助組織を再編成する試みもなされている。もちろんこうした営みがすべてうまくいくものではないものの、そのなかには、外部からの力を咀嚼し、生活世界を再構築していこうとする、小さな共同体に内発する新たな共同性の萌芽が確認できる。たとえば、西ケニアの山村では、血縁や地縁に閉じられた伝統的相互扶助を擬装し、本来なら対象とされない「他者」を儀礼的に変換しながら互助システムを拡大運用していく新しい暫定的な共同性が生成されている（松田業績番号16、50）。こうした共同性によって、危機的な状況下における生活世界の充実が実現されてきたのである。周縁部の共同体の生活世界

に根ざしたこの共同性は、単一で絶対的な伝統的共同意識とも、流動的で断片化されたポストモダンの主体とも異なる。それは、確固とした連帯が実現可能で、同時に、固定されることのない「生成する共同性」である。こうした問題設定のうえにたつて、本研究は、現代世界が必要とする新しい共同性の可能性を、これら周縁部の共同体における生活世界に求めた。そして、日本、アジア、アフリカにおける共同体の生活世界に胚胎する共同性が、さまざまな生活領域において創造され再編成される過程分析を通して、ネオリベラル的統治システムに対応・対抗する生活世界の潜在力解明を試みた。新しい生活人類学の構築を目指すのである（松田, 2008）。それを通して、これまであいまいで抽象的修辭として用いられがちであった生活世界や生活の論理を、具体的で有効な社会分析の枠組として提示することを目指した。

## 2. 研究の目的

現代世界において、これまで人類学が研究の対象としてきた（伝統的）共同性は変質させられ解体されつつあるように見える。それは、ネオリベラル的社会的秩序の再編成によって、これまで存在し機能してきた人々の繋がりを切断し断片化、流動化させていく現象であった。人間が社会生活を営む限り、他者とのあいだの連帯は不可欠であり、そのための共同性を必要とする。しかし一方で、共同性はつねに、共同体への無条件の服従や他者の暴力的排除を付随させるため、共同性を批判しその解体を志向する視点が出現することになる。現代のネオリベラル的ガバメ

ンタリティは、こうして解体され断片化された秩序を、さらに巧妙に支配・統制していくものだ (Bauman, Z. 2001, 2005)。

では、このようなネオリベラリズム的な統治システムに対して、そこで生を営む人々は、いったいどのようにして生の基盤を充実させていくことができるのだろうか。また現代人類学は、こうしたネオリベラリズム的な社会秩序のなかでどのような営みに可能性を見いだせるのだろうか。本研究では、こうしたグローバル化のなかで進行している共同性の解体・再編成の過程を、それがもっとも顕著な形で現象する「周縁部の小さな共同体」の視点から検討した。そのうえで、小さな共同体が強力な外部条件の影響のなかで生成しつつある潜在的共同性の可能性を具体的に提示することを目的とした。そのさい基本的視座として本研究が目指すのが、断片化液状化の現象する場である「生活世界」のもつ多義的な可能性であった。

### 3. 研究の方法

研究の基本的な方法は、「小さな共同体」の「生活世界」において生成される共同性を把握するためのインテンシブなフィールド調査である。それに基づいて全体の計画を二段階で構成した。第一に、外部条件のもとで共同体の基盤が激しく揺らぐなかで、困難を克服するために共同体が創意工夫を凝らす現場として、自然・生態系（環境を保全するために編み出す共同性）、社会・関係系（相互に扶助し紛争を解決する際に創造する共同性）、文化・創造系（精神世界や価値の揺らぎに対応して生成される共同性）の3系を設定した。各系の現場において、共同体が創造・再創造する共同性を実証的に解明した。第二に、この生活世界主導の共同性生成が、世界各地の共同体で生起する共通の現象で

あることを確認するために、日本・東アジア、東南・南アジア、アフリカの共同体において、（共同性生成に向けた）生活世界の潜在力の比較分析を行い、新しい共同性に関する一般モデルを構築した。

### 4. 研究成果

現代世界が経験している新自由主義的激動は、人類学者のフィールドとそのフィールドで暮らしている人々に直接的な影響を与えている。内戦と殺戮、開発と環境破壊、移民と排除、貧困と感染症の蔓延、といった「問題」は、たんなるローカルな「問題」にとどまらず、グローバルな依存関係のなかで現象する。また人類学者自身が、暴力的衝突や内戦に巻き込まれたり、環境破壊や大規模開発、あるいは環境保全や開発反対運動に関わったりすることは、今やフィールドの日常となりつつある。こうした状況に直面した人類学は、これまでのフィールドにおける中立性と客観性を強調する立場から、対象への関与と価値判断を積極的に承認する立場へと移行していくことになる。しかしながら異文化のフィールドへの「関与」や「介入」を正当化する論理は何なのだろうか。本研究は、生活人類学的視点を樹立してこの問いに答えようとする知的・実践的な研究である。そのため本研究は、日本・東アジア、東南アジア・南アジア、アフリカの3つの地域的クラスターと、自然・生態、社会・関係、文化・創造という三つの系を設定し、それぞれを専門とする研究者を配して統一した視点を共有し活用する共同調査を実施した。

本研究は、新自由主義の時代の特徴である「普遍主義」の勃興の様相を明らかにした上で、それがもつ必然性と危険性を検討し、相対主義的な世界と新たに登場した普遍主義的な世界認識をこれからの人類学はどのよ

うに接合・折衝させことができるのかについて共同で検討した。それによって、この二つの世界認識を現代人類学はいかにして接合し、錯綜する現実に対処する方向性を定めるのかについて一つの視点を獲得した。それが日常人類学の生活論に依拠したアプローチであった。それは日常世界のなかで普遍主義的価値・言説と相対主義的世界観の価値・言説が、一方で本質化され自然化されながら、他方で「生活世界安定化のための便宜」に基づいて範列的に操られながら表出（活用）されると捉えるものであり、この視点から四つのクラスターと三つの系の研究成果を総合した。このように普遍主義的世界認識と相対主義的世界観を、生活世界のなかに再定位してもう一つ別の次元で両者の共存・折衝・接合・住み分けを展望することで、人類学は「関与」と「介入」の回路の可能性を獲得することができる。その先に現代世界と切り結ぶ現代人類学の世界を展望することができたのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 24 件)

- ① □ 中村律子、「ネパール社会における「Sewa/コミュニティ」に関する一考察」『現代福祉研究』13巻、査読有、47-63、2013.
- ② □ 川田牧人、「〈教材〉としての枝下用水」『矢作川研究』17巻、査読無。45-54、2013.
- ③ □ 伊地知紀子、「帝国日本と済州島チャムスの出稼ぎ」『日本学』34巻、査読有、71-117、2013.
- ④ □ 伊地知紀子、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(11・上下)」『大阪産業大学論集』15、査読無、157-177. 2013.
- ⑤ □ MATSUDA Motoji FURUKAWA Akira,” Potentiality of Indigenous Knowledge at the Times of Globalization: From Experiences of Local Communities in Kenya, Nepal, Thai and Japan”, *The Roles of Local Knowledge in Globalized Context 2011*, 査読無、7-17、2011.
- ⑥ □ MATSUDA Motoji, “Towards Understanding Africa: From Multi-Perspectives” *The Roles of Local Knowledge in Globalized Context*, 査読無、89-100, 2011.
- ⑦ □ 松田素二、「理不尽な集合暴力は誰がどのように裁くことができるか—ケニア選挙後暴動の事例から」『フォーラム現代社会学』10、査読有、37-49、2011.
- ⑧ □ 古川彰、「幸福の単位—昭和戦前・戦中期における家、村、国家」『関西学院大学社会学部紀要』114号、査読無、79-99、2011.
- ⑨ □ 伊地知紀子、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(9・下)—梁寿玉さんへのインタビュー記録—」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』、査読無、111-127、2011.
- ⑩ □ TAHARA Noriko, “Preparing Myel Agwara for Cezario Oungi Unu: An Overview of the First and Second Meetings” *The Bulletin of Shitennoji University*, 査読無、387-406, 2011.
- ⑪ □ 田原範子、「移動に住まう人びとはどこに埋葬されるのか—東アフリカ・ナイロート系アルル人のティボ、ジョク、アピラをめぐる—」『国立歴史民俗博物館研究報告』169号、査読有、167-208、2011.
- ⑫ □ 松田素二、「反人種主義という困難—『人種と歴史』を読み直す」『KAWADE 道の手帖 レヴィ=ストロース 入門のために 神話の彼方へ』2010、査読無、135-139、2010.
- ⑬ □ 鳥越皓之、「同族団としての家連合」『日本の社会と文化(社会学ベーシックス)』10巻、査読無、13-22、2010.
- ⑭ □ 中村律子、「ネパールにおける「Sewaの場」と老人ホームの位置」『現代福祉研究』11号、査読無、125-142、2010.
- ⑮ □ 川田牧人、「深い」多元性と文化相対主義」『文化人類学』75-1、査読有、81-100、2010.
- ⑯ □ TAHARA Noriko, ”Converting Life-world in Pursuit of Sauce, Space and Source: People's Trajectories and Spaces in Uganda” *The Bulletin of Shitennoji University* Vol.50, 査読有、249-262, 2010.
- ⑰ □ 伊地知紀子、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(7-8・上下)—金春海さんへのインタビュー記録— (共著)」『大阪産業大学論集』9号、査読無、143-158、2009-2010.
- ⑱ □ 伊地知紀子、「泉靖—『済州島』が示す済州島研究の意義と課題」『耽羅文化』38号、査読有、37-56、2010.
- ⑲ □ 古川彰、「社会表象研究の地平—「生きられた文化」への眼差し—」『関西学院大学

- 社会学部紀要』111号、査読無、71-85、2010.
- ②〇松田素二、「暴力の舞台としてのストリート—2007-8年ケニア・ポスト選挙暴動を事例として—」『ストリートの人類学』81下巻、査読無、385-406、2009.
- ②①松田素二、「構造的弱者と共同性—京都市在住朝鮮人のライフヒストリー調査から考える—」グローバル研究叢書1『グローバル化現象のなかの共同体/共同性の生成：グローバル化を飼い慣らす』I、査読無、3-21、2009.
- ②②古川彰、「向地方性知識学習的方法—生活環境主義思想」『民俗典籍文字研究』5集、北京師範大学紀要、査読無、50-59、2009.
- ②③和崎春日、「アフリカと日本の自他交流から見た異文化理解—学びあいの構造と双方向の救済」『アフリカにおける天理教の活動』天理大学おやさと研究所、査読無、35-43、2009.
- ②④藤倉達郎、「ヨゲラージ・チョーダリとネパールのカマイヤ解放運動」『人権と部落問題』788巻、査読無、56-61、2009.

[学会発表] (計 16 件)

- ① MATSUDA Motoji, “Beyond Romanticization of Community-based Knowledge and Institutions” Kyoto International Seminar 2012, Kyoto Univ. 2012.11.24.
- ② TORIGOE Hiroyuki, “The New Trend of Community Planning after the 3.11 Disaster in Japan” International Rural Sociological Association, Lisbon, 2012.7.31 .
- ③ Nakamura Ritsuko, “Globalization and Local System— Transformations of “Place of Sewa” and elderly people in Nepal —” Kyoto International Seminar 2012, Kyoto Univ. 2012.11.24.
- ④ FUJIKURA Tatsuro, “Three Aspects of Community among the Tharus of Western Nepal” Kyoto International Seminar 2012, Kyoto Univ. 2012.11.24.
- ⑤ FURUKAWA Akira, “Re-assembling Communities with the Incorporation of Globalized Civic Principles” Kyoto International Seminar 2012, Kyoto Univ. 2012.11.24.
- ⑥ TAHARA Noriko, “How Peoples cope with the Cotton matter: From the Case of Fishing Village in Lake Albert”, Kyoto International Seminar 2012 “Re-creating Communities in a Globalized Setting”
- Kyoto International Seminar 2012, Kyoto Univ. 2012.11.24.
- ⑦ IJICHI Noriko, “Social Relation and Mutual Aid Practices in South Korea: Fragmentary examination of common benefit and debt in Jeju” Kyoto International Seminar 2012, Kyoto Univ. 2012.11.24.
- ⑧ MATSUDA Motoji, “Beyond Romanticization of Customary Mechanism of Conflict Resolutions Notes for further discussion presented to the First International “Forum on Conflict Resolution and Coexistence through Reassessment and Utilization of “African Potentials” Silver Springs Hotel, Nairobi Kenya, 2011.12. 3
- ⑨ FUJIKURA Tatsuro, “Political Mobili zations, Spatiality, and the Production of Locality in Western Nepal” International Conference on Changing Dynamics of Nepali Society and Politics, organized by Alliance for Social Dialogue, Shanker Hotel, Kathmandu, 2011.8.17.
- ⑩ MATSUDA Motoji, “How the violent -torn societies reconciled and healed ? With a special reference to PEV in Kenya—“2010 International Research Forum of African Studies, Kyoto University, 2010.7.31.
- ⑪ MATSUDA Motoji, “Forest Conservation Discourse as the Weapons of the Strong in a Environmental Crisis of Kenya and Nepal” The Roles of Local Knowledge in Globalized Context, Kyoto, Kyoto International Workshop 2010, Kyoto University, 2010.11.23.
- ⑫ MATSUDA Motoji, “How the collective violence judged, the justice of victims restored, the strife-riven society reconciled?” Contextualizing Post-reconciliation Violence: Globalization, Politics and Identities in Africa, International Symposium (招待講演), Embassy of Japan in Kenya, 2011.1.20.
- ⑬ TORIGOE Hiroyuki, “New Trends in the Planning and Maintenance of Countryside Scenery in Japan” 4th ARSA International Conference (招待講演), ARSA Philippines, 2010.9.10.
- ⑭ FUJIKURA Tatsuro “The Production

of Locality in Contemporary South Asia” American Anthropological Association Meeting, Sheraton New Orleans, 2010.11.17.

- ⑮ MATSUDA, Motoji, “Local Community and Environmental Conservation: “Think Globally, Act Locally Reconsidered” Communities of Becoming’ in Mainland South East Asia, Chiang Mai Uni. 2010.3.7.
- ⑯ TAHARA, Noriko, “Converting Life-world in Pursuit of Sauce, Space, and Source: Interface to be realised?”, ‘Peoples’ Trajectories and Spaces in Uganda’ Kyoto University, 2010.3.25.

[図書] (計 20 件)

- ① 松田素二, 『身体化の人類学』菅原和孝編、世界思想社、全 464、2013.
- ② 古川彰, 『地域・生活・国家 (21 世紀への挑戦)』、日本経済評論社、全 250、2012.
- ③ FUJIKURA Tatsuro, *Discourses of Awareness: Development, Social Movements and the Practices of Freedom in Nepal*, Martin Chautari (Kathmandu, Nepal), 全 316 ページ、2013.
- ④ 田原範子, 『ポピュラー文化のミュージアム』石田佐恵子・山中千恵・村田麻理子編、ミネルヴァ書房、全 353 ページ、2013.
- ⑤ 伊地知紀子, 『東アジア地域間の移動と交流』済州大学校耽羅文化研究所、全 590 ページ、2013.
- ⑥ 鳥越皓之, 『水と日本人』、岩波書店、全 246 ページ、2012.
- ⑦ 中村律子, 『実践としてのコミュニティ』平井 京之介 編、京都大学出版、全 350 ページ、2012.
- ⑧ 川田牧人, 『呪術の人類学』白川千尋／川田牧人編、人文書院、全 322 ページ、2012.
- ⑨ 伊地知紀子, 『제주여성사Ⅱ 일제강점기』(済州女性史Ⅱ 日帝強占期) 朴賛植他編、済州発展研究院、全 720 ページ、2012.
- ⑩ 松田素二, 『ケニアを知るための 55 章』明石書店、全 376、2012.
- ⑪ 松田素二, 『生業と生産の社会的布置』松井健、野林厚志、名和克郎共編、岩田書院、全 418、2012.
- ⑫ 松田素二, 『二十世紀〈アフリカ〉の個体形成』真島一郎編、平凡社、全 765 ページ、2011.
- ⑬ 鳥越皓之, 『地域の力で自然エネルギー!』岩波書店、全 62 ページ、2010.
- ⑭ FURUKAWA Akira, *Jarun Hiti: Traditional Water Use in Nepal*, Vajra

Publications (in Kathmandu, Nepal), 全 131 ページ、2010.

- ⑮ 古川彰, 『アユを育てる川仕事』築地書館、全 265 ページ、2010.
- ⑯ 川田牧人, 『グローバル化のなかの宗教—衰退・再生・変貌—』私市正年・寺田勇文・赤堀雅幸編、上智大学出版、全 216 ページ、2010.
- ⑰ 和崎春日, 『民俗文化の探求』谷口貢・鈴木明子共編、岩田書店全 428 ページ、2010 年
- ⑱ 松田素二, 『文化人類学事典』日本文化人類学会編、丸善、全 833 ページ、2009 年
- ⑲ 古川 彰編、『暮らしと歴史のまなび方』、関西学院大学、全 108 ページ、2009 年.
- ⑳ 和崎春日, 『祭・芸能・行事大辞典』小島美子 和崎春日他監修、朝倉書店、全 2116 ページ、2009 年.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松田 素二 (Matsuda Motoji)  
京都大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：50173852

### (2) 研究分担者

鳥越 皓之 (Torigoe Hiroyuki)  
早稲田大学・人間科学学術院・教授  
研究者番号：80097873

和崎 春日 (Wazaki Haruka)  
中部大学・国際関係学部・教授  
研究者番号；40230940

古川 彰 (Furukawa Akira)  
関西学院大学・社会学部・教授  
研究者番号：90199422

中村律子 (Nakamura Ritsuko)  
法政大学・現代福祉学部・教授  
研究者番号：00172461

藤倉 達郎 (Fujikura Tatsuro)  
京都大学・アジアアフリカ地域研究・教授  
研究者番号：80419449

伊地知紀子 (Ijichi Noriko)  
大阪市立大学・文学部・准教授  
研究者番号：40332829

川田 牧人 (Kawada Makito)  
中京大学・現代社会学部・教授  
研究者番号：30260110

田原 範子 (Tahara Noriko)  
四天王寺大学・人文社会学部・教授  
研究者番号：70310711

### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号：